

midnight poetry lounge vol.11 「ロバート・フロストの詩を読む」 レポート

2012年9月1日、池袋・ルノアール会議室で、水島英巳氏を講師に迎えて、midnight poetry lounge vol.11 「ロバート・フロストの詩を読む」が開かれた。ロバート・フロストといえば、ピューリッツァー賞を4回も受賞した詩人、ケネディ大統領の就任式で詩を朗読した詩人など、アメリカの国民的詩人という印象があるが、いまフロストの詩を（日本語で）読もうとすれば、岩波文庫の『アメリカ名詩選』などでいくつかの訳詩を読むことができるばかりである。そのいくつかの詩を読むとき、フロストの謎というか闇のようなものにぶつかる。それはどこからくるものだろう。フロストの詩はそのようにして読む者を森の奥に誘うような魅力があるのだが、水島さんがどのようにフロストを読むのか楽しみにして出かけた。

ロバート・フロスト（1874-1963）は、サンフランシスコで生まれたが、暴力的であった父の死後、母とマサチューセッツ州に移り、ハーヴァード大学で研究生として学ぶも二年でやめて、農場経営を数年した後、イギリスに渡り、そこでエリオットやパウンドと会い、詩集『A Boy's Will』『North of Boston』を出して、詩人として立つことになる。その後、帰国して、ニューハンプシャー州等に居を定め、以後、「ニューイングランドの田園詩人」として国民的な栄誉に浴するが、子供の夭折や自殺、あるいは妻の急死など、家庭的には不幸な詩人であったと、フロストのバイオグラフィーについて触れた後、水島さんは、フロストの詩にはオモテとウラの意味があり、読み方として、ふたつあると語った。ひとつは、自然詩人としてのフロスト。もうひとつは、19世紀と20世紀のクロスロードに立つ詩人としてのフロスト。

*

当日、水島さんが紹介したフロストの詩については別添の資料を読んでいただくとして、以下は僕のメモ書きである。

冒頭に紹介された「牧場」という詩は、フロストの詩のなかではよく知られた一篇である。この詩は、詩集 North of Boston の序詩として置かれたものだが、フロストのアンソロジーのほとんどに序詩として載っているという。

水島さんがこの詩を知ったのは、1998年ニューデリーで開催された第二十六

回国際児童図書評議会で、皇后様が「子供の本を通しての平和 子供時代の読書の思い出」という基調講演をされたのをたまたまテレビで見たときで、そこで疎開中に読んだ思い出の詩としてフロストの「牧場」を朗読されたことが印象に残ったという。ちなみに、そのときのおことばは次のとおりである。

「英語で読むと、掃除（クリーン）、落葉（リーヴス）、澄む（クリアー）、なめる（リック）、小牛（リトルカーフ）など、1音の重なりが快く思われました。しかし、こうしたことはともかくとして、この原文を読んで私が心から感服したのは、私がかつて読んだ阿部知二の日本語訳の見事さ、美しさでした」

フロストは、農作業などをよく詩に書いたようだが、「草刈り」もそのひとつだろうか。この詩は、だが単純ではない。水島さんはフロスト詩の特徴のひとつに「proverb となるような一行が多い」ということを挙げたが、「事实は労働の知るもつとも美しい夢である。」などという詩句を読むと、「自然詩人」という範疇だけではとらえきれないものが含意されているように思われる。フロストの労働詩には、人間社会からの離脱とそれへの復帰とが含意されていると、水島さんは言った。

この後に紹介された「行かなかった道」という詩も味わい深い。この詩について、水島さんは、卒業式の時に読まれるなど、さまざまに解釈される詩であるが、ほんとうは喪失感に満ちた詩ではないかと言う。そして、「かの時に我がとらざりし分去れの（わかされの）片への道はいづこ行きけむ」という皇后様の御歌を引用して、水島さんは、日本でフロストの最良の読み手であると思うと語った。

水島さんがフロストの詩について語ったことで印象に残ったことばはいくつかあるが、「the sound of sense を聴く」ということばは興味深かった。当日は、水島さんが用意した CD で、フロストの朗読を何篇か聴くことができたが、聴いていて実に気持ちがよくなる朗読であった。フロストはよく口語で詩を書いたというが、the sound of sense の一端に触れえたような気分させられた。

「雪の夜、森のそばに足をとめて」という詩についても触れておきたい。この詩はアメリカでは絵本となっているほど、人口に膾炙されている詩であるようだ。訳詩で読んでも、その謎に満ちた魅力は伝わってくる。ボルヘスやテリー・イーグルトンなどもこの詩に言及しているが、「この詩でとくに目を引くのは、描かれた出来事の平凡さ（素朴で古風とさえいえる言葉の持ち味にも、それが反映されている）と、その枠組みとなっている精巧な脚韻構成とのずれか

ら生まれる緊張だ」というイーグルトンの指摘はそのとおりで、水島さんもその「形式と内容のアンバランス」の魅力について語った。さらに、水島さんはブロッキーのフロスト論「嘆きと理性」(grief and reason)に言及しつつ、フロストの「森」について興味深い話をされたが(例えば、「森」は、自我の破壊的衝動を象徴している、云々)、そのあたりについては当方の不勉強もあり、今後の課題としたい。

「入りなさい」。この詩も奥が深い。これは水島さんが訳したものだが、最終連の口語的な部分の訳など、いろいろと考えられたであろうことが想像される。ブロッキーは、20行かけて出されたこの詩の答えは「死」であると言っているようだが。

驚いたのは、最後に紹介された「子供の墓」という長詩である。この詩を読むのはもちろんはじめてであったが、フロストがこのような詩を書いていることに驚かされた。水島さんは、「対話詩」「牧歌」と言うが、フロストの森の奥に潜むものに触れたような気がした。水島さんは、この詩に触れて、「場所」(Home)——フロストの場合、ニューイングランドを指すのだろうか——があるということの意味について語ったが、そのとき、僕は、アメリカ詩人のひとりであるフロストとあらためて向かい合ったように思う。

最後に、フロストのことばを引用して、このレポートを終えたい。

「一篇の詩は喉のなかの一塊として起こる。郷愁、恋煩いのようなもの。表現に向かったの、実現、遂行を発見する努力だ。完璧な詩とは、感情が思想を発見し、思想が言葉を発見する詩…もしあえて言えというなら、私は次のように詩を定義するだろう。行為になった言葉 (words that have become deeds)、それが詩だと」

ヴァーモント州にあるロバート・フロストの記念館を訪ねたという水島さんのフロスト詩の読み解きは味わい深く、詩を読むことのなんたるかを教えられるものであった。前回の岩田英哉氏の「ハート・クレインの詩を読む」から今回の水島英巳氏の「ロバート・フロストの詩を読む」と、これまできちんと読んだことのないアメリカの詩人を続けて読んできたが、midnight poetry loungeの主題は「詩を読む」ことであるとあらためて認識した次第である。(文責・岡田幸文)

*

以下は、水島さんが当日用意した資料である。

【自然・労働】

The Pasture

I'm going out to clean the pasture spring;
I'll only stop to rake the leaves away
(And wait to watch the water clear, I may):
I shan't be gone long. —You come too.

I'm going out to fetch the little calf
That's standing by the mother. It's so young
It totters when she licks it with her tongue.
I shan't be gone long. —You come too.

牧場 (安藤一郎訳)

わたしは牧場(まきば)の泉をきれいにしようと出かけるところ、
ちょっと止まって木の葉を掻きのけるだけですよ
(そして水の澄むまで待って見る、たぶん)、
長くはかからない——あなたも来なさい。

わたしは小さな仔牛(こうし)を連れてこようと出かけるところ、
母牛のそばに立っているのを。まだ幼くて
母牛が舌でねぶるとよろよろするんですよ。
長くはかからない——あなたも来なさい。

「牧場 (まきば)」 (阿部知二訳)

牧場の泉を掃除しに行ってくるよ。
ちょっと落葉をかきのけるだけだ。
(でも水が澄むまで見てるかも知れない)
すぐ帰ってくるんだから——君も来たまへ

小牛をつかまへに行ってくるよ。
母牛（おや）のそばに立ってるんだがまだ赤ん坊で
母牛（おや）が舌でなめるとよろけるんだよ。
すぐ帰ってくるんだから——君も来たまへ

Mowing

There was never a sound beside the wood but one,
And that was my long schythe whispering to the ground.
What was it it whispered? I knew not well myself;
Perhaps it was something about the heat of the sun,
Something, perhaps, about the lack of sound—
And that was why it whispered and did not speak.
It was no dream of the gift of idle hours,
Or easy gold at the hand of fay or elf:
Anything more than the truth would have seemed too weak
To the earnest love that laid the swale in rows,
Not without feeble-pointed spikes of flowers
(Pale orchises), and scared a bright green snake.
The fact is the sweetest dream that labor knows.
My long schythe whispered and left the hay to make.

(from A Boy's Will [1913])

草刈り (安藤一郎訳)

森のそばではただ一つの音しか聞こえなかった、

それは地面に囁くわたしの長い大鎌であった。
大鎌の囁くのは何だったろう？わたし自身もよくわからなかった。
たぶん、何か日光の暑さについてのことか、
何か、たぶん、音のないことについてか——
だからして大鎌は囁くばかりで話さなかったのだ。
それは怠惰な時間の恵みの夢でもなく、
または妖精の手でたやすく得られる夢でもなかった。
湿地の草を列にして倒していき、それには
なよなよした先の尖った花（淡(うす)いろの野生蘭）もまじり、
そしてきらきらした緑いろの蛇を脅(おびや)かす真剣な愛には
真実をこえたものは弱すぎるようにおもわれたであろう。
事実は労働の知るもっとも美しい夢である。
わたしの長い大鎌は囁いた、そしてあとにこれからつくる乾草(ほしぐさ)を残した。

The Tuft of Flowers

I went to turn the grass once after one
Who mowed it in the dew before the sun.

The dew was gone that made his blade so keen
Before I came to view the levelled scene.

I looked for him behind an isle of trees;
I listened for his whetstone on the breeze.

But he had gone his way, the grass all mown,
And I must be, as he had been,—alone,

As all must be,' I said within my heart,
Whether they work together or apart.'

But as I said it, swift there passed me by

On noiseless wing a 'wildered butterfly,

Seeking with memories grown dim o'er night
Some resting flower of yesterday's delight.

And once I marked his flight go round and round,
As where some flower lay withering on the ground.

And then he flew as far as eye could see,
And then on tremulous wing came back to me.

I thought of questions that have no reply,
And would have turned to toss the grass to dry;

But he turned first, and led my eye to look
At a tall tuft of flowers beside a brook,

A leaping tongue of bloom the scythe had spared
Beside a reedy brook the scythe had bared.

I left my place to know them by their name,
Finding them butterfly weed when I came.

The mower in the dew had loved them thus,
By leaving them to flourish, not for us,

Nor yet to draw one thought of ours to him.
But from sheer morning gladness at the brim.

The butterfly and I had lit upon,
Nevertheless, a message from the dawn,

That made me hear the wakening birds around,

And hear his long scythe whispering to the ground,

And feel a spirit kindred to my own;
So that henceforth I worked no more alone;

But glad with him, I worked as with his aid,
And weary, sought at noon with him the shade;

And dreaming, as it were, held brotherly speech
With one whose thought I had not hoped to reach.

Men work together,' I told him from the heart,
Whether they work together or apart.'

(from A Boy's Will [1913])

花のひとむれ (安藤一郎訳)

わたしはそこへ行って草を一度ひっくり返した、
日が昇る前に露の中でそれを刈った者のあとに。

その平らになった場所に来て見る前に
鎌の刃をそのように冴えさせた露は消えていた。

わたしは樹々の小島のうしろに彼の姿を探した、
わたしは微風の中に彼の鎌を研ぐ音を求めた。

だが彼は立ち去っていたのだ、草はすべて刈られて、
そこでわたしは当然、彼もそうだったように一ひとりであった、

「だれもが当然ひとりなのだ」とわたしは心の中で言った、

「いっしょに働くとも、別々に働くとも」

そう言った折から、わたしのそばを音もなく
飛びすぎていく一羽のうろたえ迷う蝶があった、

一夜を經過おぼろになった記憶をたよりに
昨日の喜びであった憩いの花を求めて。

わたしは蝶があたりをぐるぐる飛び回るのを見ていた、
花が地上に倒れて萎んでいるところと覚しく。

それから眼のとどくかぎり遠くまで飛びさかって、
蝶はまたひらひらと翅をあおりながら戻ってきた。

わたしは自分で答えのない問いを思いめぐらして、
むしろ草をひっくり返す仕事に向かいたかった。

ところが蝶の方が先んじて、わたしの眼を導いていった、
小川のほとりにある丈高い花のひとむれに、

大鎌が残しておいた躍っている舌のような花々、
大鎌が刈りひらいた葦多い小川のほとりに。

露の中で草を刈った者はこのように花々を惜しんだのだ、
咲くままにおくことによって、しかもわたしたちのためでなく、

またわたしたちの或る思いを彼にひきつけるためでもない、
水辺におけるほんとうの朝の喜びからだ。

その蝶とわたしは、それにもかかわらず、
暁から寄せられた言葉に接することになった、

わたしに周囲の目ざめかける鳥の声を聞かせ、
大地に囁く彼の長い鎌の音を聞かせる、

そしてわたし自身に近い一つの精神を感じさせる言葉。
故にそれ以後わたしはもう一人で働くことはなくなった。

彼と共にいることを喜び、彼の助けがあるとして働き、
そして疲れると、真昼には彼と共に日陰を求めた。

いわば、夢みながら、わたしが察知するとも思わなかった
考えを持つ人と親密な言葉を交わしているのだった。

「人々はいっしょに働く」とわたしは心の中から言った、
「いっしょに働くとも、別々に働くとも」

【自然・森】

Stopping by Woods on a Snowy Evening

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep

Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep.
And miles to go before I sleep.

(from New Hampshire [1923])

雪の夜、森のそばに足をとめて (川本皓嗣訳)

この森の持ち主が誰なのかは、おおかた見当はついている。
もっとも彼の家は村の中だから、
私がこんな所に足をとめて、彼の森が
雪でいっぱいになるのを眺めているとは気付くまい。

小柄な私の馬は、近くに農家ひとつないのに、
森と凍った湖の間にこうして立ち止まるのを、
変だと思うに違いない
一年中で一番暗いこの晩に。

何かの間違いではないか、そう訊ねようとして、
馬は、馬具に付けた鈴をひと振りする。
ほかに聞こえるものといえば、ゆるい風と
綿毛のような雪が、吹き抜けていく音ばかり。

森は本当に美しく、暗く、そして深い。
だが、私にはまだ、果すべき約束があり、
眠る前に、何マイルもの道のりがある。
眠る前に、何マイルもの道のりがある。

Spring Pools

These pools that, though in forests, still reflect
The total sky almost without defect,
And like the flowers beside them, chill and shiver,
Will like the flowers beside them soon be gone,
And yet not out by any brook or river,
But up by roots to bring dark foliage on.

The trees that have it in their pent-up buds
To darken nature and be summer woods --
Let them think twice before they use their powers
To blot out and drink up and sweep away
These flowery waters and these watery flowers
From snow that melted only yesterday.

(from West-Running Brook [1928])

春の水たまり (藤本雅樹訳)

森の中であって、なお ほぼ完全に 空全体を
静かに映し出しながら、傍らに咲く花のように、
寒々と震えている、これらの水たまりも
やがては傍らの花のように、姿を消してしまうだろう、
それも 小川や河に さらわれてしまうからではなく、
鬱蒼とした木の葉をもたらず 木の根に吸い上げられて消えてしまうのだ。

硬く閉じた木の芽のうちに 自然を翳らせ やがては
夏の森となる 木の葉を秘めた樹木よ—
そんな樹木に 思い改めさせよう ほんの昨日
溶けたばかりの雪から生まれた これら 花の
咲き乱れる水たまりや 水辺を飾る これらの花を
蔽い隠し 飲み干し そしてかき消そうと その力をふるう前に。

Come In

As I came to the edge of the woods,
Thrush music -- hark!
Now if it was dusk outside,
Inside it was dark.

Too dark in the woods for a bird
By sleight of wing
To better its perch for the night,
Though it still could sing.

The last of the light of the sun
That had died in the west
Still lived for one song more
In a thrush's breast.

Far in the pillared dark
Thrush music went --
Almost like a call to come in
To the dark and lament.

But no, I was out for stars;
I would not come in.
I meant not even if asked;
And I hadn't been.

(from A witness tree [1942])

入りなさい (拙訳)

森の端まで来ると
ツグミの音楽—聴け！
今、ここ森の外が夕闇なら、
内部は暗闇だ。

森の中は暗すぎて鳥でさえ
うまく羽ばたいても
心地よいねぐらは見つからない、
まだ歌うことだけはできる。

太陽の光の最後の一筋は
西の方に消えて行ったが
もう一つの歌のために
光りはツグミの胸のなかに生きている。

樹々の柱のはるかな暗闇に
ツグミの音楽は響いてゆく—
入りなさい、という呼びかけのように
闇へと、そして嘆き悲しめというように。

いや私は入らない、ここで星を眺めていよう
私は入らない。
たとえ頼まれたとしてもお断りだ、
頼まれたことも今までなかったけど。

【自然・暴力・死】

Lodged

The rain to the wind said,
'You push and I'll pelt.'

They so smote the garden bed
That the flowers actually knelt,
And lay lodged--though not dead.
I know how the flowers felt.

(from West-Running Brook [1928[]

なぎ倒された花 (藤本雅樹訳)

雨が風に向かって言った、
「君のひと押しがあれば、激しく降って見せるよ」
そして 彼らは力をあわせて庭の花壇を打ちつけた。
すると 花たちは 本当に ひざまずくように、
なぎ倒されてしまった—むろん 死んでしまったというわけではなかったけれど。
僕には その時の花たちの気持ちがよくわかるのだ。

【生・選択】

The Road Not Taken

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both
And be one traveler, long I stood
And looked down one as far as I could
To where it bent in the undergrowth;

Then took the other, as just as fair,
And having perhaps the better claim,
Because it was grassy and wanted wear;
Though as for that the passing there
Had worn them really about the same,

And both that morning equally lay

In leaves no step had trodden black.
Oh, I kept the first for another day!
Yet knowing how way leads on to way,
I doubted if I should ever come back.

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence:
Two roads diverged in a wood, and I—
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference.

(from Mountain Interval [1916])

行かなかった道 (駒村利夫訳)

黄ばんだ森の中で道がふたつに分かれていた。
口惜しいが、私はひとりの旅人、
両方の道に行くことはできない。長く立ち止って
目のとどく限り見渡すと、ひとつの道は
下生えの中に曲がりこんでいた。

そこで私はもう一方の道を選んだ。同じように美しく、
草が深くて、踏みごたえがあるので
ずっとましだと思われたのだ。
もっともその点は、そこにも通った跡があり
実際は同じ程度に踏みならされていたが。

そして、あの朝は、両方とも同じように
まだ踏みしだかれぬ落ち葉の中に埋まっていたのだ。
そうだ、最初眺めた道はまたの日のためにと取っておいたのだ！
だが、道が道にと通じることは分かっただけで、

再び戻ってくるかどうかは心許なかった。

今から何年も何年もあと、どこかで
ため息まじりに私はこう話すだろう。
森の中で道が二つに分かれていて、私は—
私は通る人の少ない道を選んだのだったが、
それがすべてを変えてしまったのだ、と。

*

cf「かの時に我がとらざりし分去れの（わかされの）片への道はいづこ行きけむ」

【生・夜】

Acquainted With the Night

I have been one acquainted with the night.
I have walked out in rain --and back in rain.
I have outwalked the furthest city light.

I have looked down the saddest city lane.
I have passed by the watchman on his beat
And dropped my eyes, unwilling to explain.

I have stood still and stopped the sound of feet
When far away an interrupted cry
Came over houses from another street,

But not to call me back or say good-bye;
And further still at an unearthly height
One luminary clock against the sky

Proclaimed the time was neither wrong nor right.

I have been one acquainted with the night.

(from West-Running Brook [1928])

夜に馴染んで (川本皓嗣訳)

わたしは夜に馴染んだ人間だ。
雨のなかを出歩いて—また雨のなかを戻ってきたこともある。
いちばん遠い街の灯の、もっと先へも歩いていった。

見るも哀れな路地のなかをのぞき込みもした。
巡回中の夜警とすれ違い、
言い訳をするのがいやで、目を伏せたこともある。

じっと立ち止まって足音を消し、
家並みごしに、向こうの通りでふっととぎれた
叫び声に耳をすましもしたが、それはわたしを

呼び戻すためでも、さよならを言うためでもなかった。
そして、もっと向こうのこの世ならぬ高みには、
煌々たる天体の時計がひとつ、空を背景に、

いまがまずい時でも、いい時分でもないと告げていた。
わたしは夜に馴染んだ人間だ。

○この形式はテルツァ・リーマ (Terza rima, 三韻句法) という。押韻した verse (韻文、詩) のスタンザ (連、詩節) の形式で、3つの連動した押韻構成から成り立っている。最初に使ったのはイタリアの詩人ダンテ・アリギエーリである。テルツァ・リーマは、「aba bcb cdc ded ...」のパターンで作られた三行連、つまり、3行で1つのスタンザを成すもの。長さには制限がないが、テルツァ・リーマで書かれた詩、または詩の部分の最後は、最後の三行連句の真ん中の行の押

韻を繰り返す一行もしくは二行連句で締めくくられる。もし「ded」で終わるのなら、最後は「e」か「ee」になる。(この解説はウィキペディアから適当に引用したものです。)

【生・愛】

Never Again Would Bird's Song Be The Same

He would declare and could himself believe
That the birds there in all the garden round
From having heard the daylong voice of Eve
Had added to their own an oversound,
Her tone of meaning but without the words.
Admittedly an eloquence so soft
Could only have had an influence on birds
When call or laughter carried it aloft.
Be that as may be, she was in their song.
Moreover her voice upon their voices crossed
Had now persisted in the woods so long
That probably it never would be lost.
Never again would bird's song be the same.
And to do that to birds was why she came.

(from A witness tree [1942])

小鳥たちの歌は二度と同じじゃあるまい (村上至孝訳)

彼は断言し 自分では信じていた
庭中の鳥という鳥はみんな
ひねもす語るイブの声を聞いたことから
彼ら自身の声に一つの倍音を
言葉は伴わないけれど彼女の意味の調子を付け加えたと。
むろんあのように優しい雄弁は

呼び声や笑い声がそれを高らかに伝えたとき
小鳥たちに影響せずにはいなかったらう。
それはとにかく 彼女は彼らの歌のなかにいた。
その上彼女の声は彼らの声と交じって
今じゃ森の中で久しく続いてきたから
おそらく二度と消え失せることはあるまい。
そして小鳥たちにそうすることが彼女の来た理由（わけ）だったのだ。

【生・受容】

Acceptance

When the spent sun throws up its rays on cloud
And goes down burning into the gulf below,
No voice in nature is heard to cry aloud
At what has happened. Birds, at least must know
It is the change to darkness in the sky.
Murmuring something quiet in her breast,
One bird begins to close a faded eye;
Or overtaken too far from his nest,
Hurrying low above the grove, some waif
Swoops just in time to his remembered tree.
At most he thinks or twitters softly, 'Safe!
Now let the night be dark for all of me.
Let the night be too dark for me to see
Into the future. Let what will be, be.'

(from West-Running Brook [1928])

受容 （藤本雅樹訳）

夕日が 雲の上に光りを投げ 赤々と燃えながら

その下の入江に 沈みかかろうとする時、
偶然姿を見せたものの気配に気づいて
叫声を上げたりするようなものなど どこにもいない。鳥たちは 少なくとも
空が暗くなりつつあるのを 知っているにちがいない。
胸の中で 静かに何ごとかを つぶやきながら、
一羽の鳥が ぼんやりとかすんだその眼を 閉じはじめる、
また 迷子になったある鳥は 巣から遠く離れすぎてしまい、
木立の上を 大急ぎで低空飛行しながら 帰りの時刻に
間に合うように 覚えのある木を目ざして 急降下してゆく。
かりに この迷子の鳥が 考えたり 静かにさえずったりするにしても せい
ぜいこんなこと だろう
「やれやれ それでは僕だけのために 夜を暗くしよう。
先のことが誰にも 見通せないくらい
夜を暗くしよう そうなるがままにしておこう」

【生・葛藤・obsession】対話詩、eclogue（牧歌）、pastoral（牧歌・田園詩）

Home Burial

He saw her from the bottom of the stairs
Before she saw him. She was starting down,
Looking back over her shoulder at some fear.
She took a doubtful step and then undid it
To raise herself and look again. He spoke
Advancing toward her: "What is it you see
From up there always?—for I want to know."
She turned and sank upon her skirts at that,
And her face changed from terrified to dull.
He said to gain time: "What is it you see?"
Mounting until she cowered under him.
"I will find out now—you must tell me, dear."
She, in her place, refused him any help,
With the least stiffening of her neck and silence.

She let him look, sure that he wouldn't see,
Blind creature; and awhile he didn't see.
But at last he murmured, "Oh," and again, "Oh."

"What is it—what?" she said.

"Just that I see."

"You don't," she challenged. "Tell me what it is."

"The wonder is I didn't see at once.

I never noticed it from here before.

I must be wonted to it—that's the reason.

The little graveyard where my people are!

So small the window frames the whole of it.

Not so much larger than a bedroom, is it?

There are three stones of slate and one of marble,

Broad-shouldered little slabs there in the sunlight

On the sidehill. We haven't to mind those.

But I understand: it is not the stones,

But the child's mound——"

"Don't, don't, don't, don't," she cried.

She withdrew, shrinking from beneath his arm

That rested on the banister, and slid downstairs;

And turned on him with such a daunting look,

He said twice over before he knew himself:

"Can't a man speak of his own child he's lost?"

"Not you!—Oh, where's my hat? Oh, I don't need it!

I must get out of here. I must get air.—

I don't know rightly whether any man can."

"Amy! Don't go to someone else this time.

Listen to me. I won't come down the stairs."

He sat and fixed his chin between his fists.

"There's something I should like to ask you, dear."

"You don't know how to ask it."

"Help me, then."

Her fingers moved the latch for all reply.

"My words are nearly always an offense.

I don't know how to speak of anything

So as to please you. I can't say I see how.

A man must partly give up being a man

With womenfolk. We could have some arrangement

By which I'd bind myself to keep hands off

Anything special you're a-mind to name.

Though I don't like such things 'twixt those that love.

Two that don't love can't live together without them.

But two that do can't live together with them."

She moved the latch a little. "Don't—don't go.

Don't carry it to someone else this time.

Tell me about it if it's something human.

Let me into your grief. I'm not so much

Unlike other folks as your standing there

Apart would make me out. Give me my chance.

I do think, though, you overdo it a little.

What was it brought you up to think it the thing

To take your mother-loss of a first child

So inconsolably—in the face of love.

You'd think his memory might be satisfied——"

"There you go sneering now!"

"I'm not, I'm not!

You make me angry. I'll come down to you.

God, what a woman! And it's come to this,

A man can't speak of his own child that's dead."

"You can't because you don't know how to speak.

If you had any feelings, you that dug

With your own hand—how could you?—his little grave;

I saw you from that very window there,

Making the gravel leap and leap in air,

Leap up, like that, like that, and land so lightly

And roll back down the mound beside the hole.

I thought, Who is that man? I don't know you.

And I crept down the stairs and up the stairs

To look again, and still your spade kept lifting.

Then you came in. I heard your rumbling voice

Out in the kitchen, and I don't know why,

But I went near to see with my own eyes.

You could sit there with the stains on your shoes

Of the fresh earth from your own baby's grave

And talk about your everyday concerns.

You had stood the spade up against the wall

Outside there in the entry, for I saw it."

"I shall laugh the worst laugh I ever laughed.

I'm cursed. God, if I don't believe I'm cursed."

"I can repeat the very words you were saying:

'Three foggy mornings and one rainy day

Will rot the best birch fence a man can build.'

Think of it, talk like that at such a time!

What had how long it takes a birch to rot

To do with what was in the darkened parlor?

You couldn't care! The nearest friends can go
With anyone to death, comes so far short
They might as well not try to go at all.
No, from the time when one is sick to death,
One is alone, and he dies more alone.
Friends make pretence of following to the grave,
But before one is in it, their minds are turned
And making the best of their way back to life
And living people, and things they understand.
But the world's evil. I won't have grief so
If I can change it. Oh, I won't, I won't!"

"There, you have said it all and you feel better.
You won't go now. You're crying. Close the door.
The heart's gone out of it: why keep it up?
Amy! There's someone coming down the road!"

"You—oh, you think the talk is all. I must go—
Somewhere out of this house. How can I make you——"

"If—you—do!" She was opening the door wider.
"Where do you mean to go? First tell me that.
I'll follow and bring you back by force. I will!—"

(from Noth of Boston [1914])

子供の墓 (安藤一郎訳)

男は彼女のほうを見るまえに、階段の下から
彼女を見ていた。女は走りおりてきた、
何か恐ろしいものを肩ごしにふり返りながら。
ためらうように一歩出て、それから戻って
からだを伸ばし、もう一度見た。

彼は彼女に近づいて言った、「何が見えるんだい、いつもそこから眺めるじゃないか—おれは知りたいんだ」
彼女はそれを聞くとふり返って、スカートを垂らしてしゃがんだ、その顔は恐怖の表情から無感覚に変わった。
男はわざとゆっくり間(ま)をおいて、「何が見えるんだ」と言い、そのあいだに階段を上がってきて、縮みうずくまる女のそばに来た。
「今日はそれを知りたいんだ—おれに聞かせてくれ」
彼女はじっと動かず、求めに応じようとしめない、いささか首をかたくし、おし黙って。
彼が眺めるままにさせて、このひとに何が見えるものか、めくらしも同然なのだから。男はわからなかった。
だがついに気がついてつぶやいた、「ああ、そうだったのか」そしてまた、
「そうだったのか」

「あれが見えるんだよ」
「なんなの—なんなのさ？」と妻はきいた。
「見えるもんですか」彼女は食ってかかった、「なんだか言ってごらんなさい」
「どうしてこれがすぐわからなかったんだらうなあ。
これまで一度も気がつかなかった。
おれは慣(な)れきっているんだ—そのためなんだよ。
おじいさんたちを埋めてある、あの小さな墓地！
家の中にすっかりおさまってしまうほど小さい、
寝室ぐらいの広さしかないんだらう。
三つの平石(ひらいし)と一つの大理石、
角ばった小さな石板(いしいた)があそこの
丘の斜面で陽(ひ)の中に光っているね。あんなもの、気にすることないんだ。
だがわかったよ。あの石じゃない、
あの児(こ)が埋まっている土まんじゅう——」

「やめて、やめて、やめて、もう」と妻は叫んだ。

彼女は手すりにかけて夫の手の下から

脱(のが)れるようにすり抜けると、素早く降りていった。

そしてきつとなった表情でこちらを見たので、

夫は思わず知らず、二度くり返して言った。

「父親が自分の亡(な)くした子供のことを話して、どこが悪いんだ？」

「あんたにそんなことが！あ、わたしの帽子は？いえ、帽子なんかいらない！

わたし、外へ出なくちゃ。外の空気にあたってくるわ。

男のひとに子供のことを口にする資格なんかありゃしない」

「エイミー、いま他人のところに行くんじゃないぞ、

おれの言うことをよくおきき。おれはこの階段を降りないぞ」

彼は坐りこんで、頬杖をついている。

「おまえに頼みたいことが一つあるんだよ」

「あんたは頼みかたさえ知らないじゃありませんか」

「それじゃあ、教えてくれ」

答えはなくて、彼女はただ掛金をいじっている。

「おれが何か言うと、いつもおまえを怒(おこ)らせてしまう。

おまえが気に入るように、どうして話したらよいか、

おれにはわからないんだよ。だが教えてくれるなら、

できるだろうと思う。どうしたらということがわからないんだ。

女とうまくやっていくには、男は半分ばかり

女にならなければいけないらしい。おれたちは何か話し合いで決められるよ。

それでおまえに触れてもらいたくない特別のことがあれば

いっさい触れないように気をつけよう。

とはいっても愛し合っている仲で、こういうことはどうも水くさいがね。

愛していない二人ならば、そういう取り決めがないといっしょに暮らしていけない。

だが愛している同士だったら、取決めなどしてやっていくことはできまい」

妻は掛金をはずしかかった。「おい、行くな—行っちゃいけない。

いまおれをさしおいて、他人のところへぐちを言いに行っちゃいかん。
人間に関したことなら、おれに話してくれ。
おまえの悲しみの仲間入りをさせてくれ。おれは他人とそんなに違ってはいはしないよ。
おまえが寄せつけないから、おれのほうで入っていけないんだ。おれにも話させてくれ。
だがおまえも少し度をこしているんだよ。
初めての子供を亡くした母親の悲しみを
そんなに深く考えて、いつまでもあきらめられないことにしているのは
いったいどういうわけだろう—おまえを愛しているものがここにいるのに。
あの児の思い出はなんとかすれば慰められるとでも思うのか——」

「ほら、皮肉に笑っているじゃないの！」

「いや、そんなことあるもんか、とんでもない！
おれは怒るぞ。いまそこへ降りていく。
全く、なんという女だ！つまり、おまえはな、
父親が自分の死んだ子供の話をしっちゃいけないというのか」

「そうですとも、あんたはそういう話しかたもわかっていないじゃないの。
少しでも思いやりがあるならば、その手で—あの小さな墓を
掘ったあんたは—どうしてあんなことができるんでしょう？
わたしはあの窓からあんたを見ていたんですよ、
砂利まじりの土をぽんぽんと、
ぽんぽんとさも軽そうに、空へ撥ねあげていたわね、
そして穴のそばに出来た小山から、土がころがり落ちていたのよ。
わたしは思ったのよ、あの男はだれだろう？そういうあんたは見も知らぬ他人
だったわ。
わたしはいたたまれず、階段を上ったり降りたりして、
また眺めたのよ、それでもなおあんたのシャベルはふり上げられていたわ。
それからあんたは家に入っていったのよ。台所のところで低くこもった声が聞こえたので、

わたしはなぜか、自分の眼で
確かめたくなくて、そこへ行ったのよ。
そのときのあんたときたら、自分の赤ん坊の墓の
生々しい土を靴につけたまま、平気で坐っているじゃないの、
そして世間話をしていたじゃありませんか。
あのシャベルを戸口の外の壁に立てかけたままで、
わたしはちゃんそれを見たのよ」

「なんだって、おもしろくもねえ話だ、
くそっ、そんな馬鹿なことあるもんか」

「あんたが言ったことばをそのまま言えるわよ。
『三日間霧がおりて、それから一日雨がふれば
いくらうまく出来た樺(かば)の木の垣根だって腐っちまうよ』って。
まあ、ああいうときに、よくもあんなことが言えたものね！
樺の木がどのくらいで腐るなんていうことと
暗くした部屋においた子供の体とどういう関係があるの。
あんたって、そういうこともわからないんだわ！生きている者は
一番近くにいる友だちだって、死人のことはわからないんですよ、
いっそわかろうとしないほうがいいくらいだわ。
そう、ひとは病気になって死ぬまで
ただひとりぼっちよ、まして死ぬときは。
友だちだって墓まで随(つ)いていくような振りはするけれども、
死人が墓の中に入らないうちに、そういう人々の心はもうそこになく、
人生と生きている人々と自分の理解しているものへ
なるべく早く戻りたいと思っているんだわ。
この世はいやのものね。もし自分で変えることができるのなら、
わたしもこんなに悲しまないですむのに。
ああ、いやだ、わたしはいやだ！」

「それでおまえは自分の言いたいことを全部言ってしまったから、気が楽にな
ったろう。

おまえはもう出かけないだろうね。泣いているな。戸をおしめ。
すっかり話してしまったんだ、意地を張ることもないだろう。
エイミー！だれかこっちへ道を歩いてくるよ！」

「あんたって—ただ話せばそれですむと思っているのね。わたし、出かけるわ
—
とにかく、この家からは。どうしたってだめなのよ、あんたになんか——」

「おい、出かけてみろ！」女は戸をあけかけていた。
「どこへ行くというんだ！まずそれからきこう。
おれはあとから追いかけて、腕づくでも連れもどすぞ。うん、やるとも！」